

# 社会人と大学生を対象とした万引き防止のための 教育プログラムの開発と実践

岡 田 涼  
時 岡 晴 美  
大久保 智 生  
清 國 祐 二  
永 富 太 一

1. 問題と目的
2. 方法
3. 結果
4. 考察

## 1. 問題と目的

近年、万引きの問題が社会的な関心を集めている。Krasnovsky & Lane (1998)によると、犯罪種としての万引きは重大な犯罪であると認識されにくかったために、その特徴について十分な研究が行われてこなかったとされている。しかし、万引きは状況によっては凶悪犯罪の一種である事後強盗になる場合もあり、決して軽視できる犯罪種ではない。また、万引きによる被害金額は、振り込め詐欺の被害総額を大きく上回るともいわれており、経済的な観点からも社会全体で対処すべき重要な問題といえる。万引きの検挙人員数はここ10年ほどでほぼ横ばいとなっており（警察庁, 2012）、万引きを行うものは一定数存在している。万引きは青少年や高齢者が行うものであると考えられがちであるが、万引きの検挙人員の半数程度は20歳から64歳までの一般成人が占めている（警察庁, 2012）。

現在、香川県では万引き対策が喫緊の課題となっている（大久保, 2012）。人口比あたりの万引き認知件数について、香川県は2002年から2009年の7年間連続でワースト1位であり、万引きの多い県として知られている。このことを受けて、平成22年度に香川県警察と香川大学の共同事業として「子ども安全・安心万引き防止対策事業」が立ち上がり、香川県内における万引きの実態把握や万引きの背景要因に関する調査、万引き防止のための啓発動画の作成などが進められている。この事業では、青少年に限定するのではなく、その保護者や社会人、高齢者など、地域全体を対象とした取り組みを進めている。

青少年の万引き防止に関しては、学校教育の役割が重視されてきた。学校場面において、生徒に万引き防止のための教育的な働きかけを行うことで、青少年の万引き防止を目指す試みがなされている。岡田・大久保・時岡・七條・松浦・大前・三好（2013）は、中学1年生を対象とした万引き防止のための教育プログラムの実践事例を報告している。この教育プログラムでは、万引きに関する正しい知識を獲得することと、万引きの背景と対策を自ら考えることという2つの要素を含んでいる。教育プログラムの効果として、中学生は万引きに関する知識を身につけ、今後自分が万引きをしないという効力感をもったことが報

告されている。また、岡田・時岡・大久保・七條・松浦（2013）は、小学生児童をもつ保護者を対象に、青少年の万引き防止のための教育プログラムを実践している。ここでも、万引きに関する知識を獲得することと、青少年が万引きに至る際の背景について保護者の立場から考えることをプログラムの核としている。その結果、プログラムに参加した保護者の多くが、万引きに関する様々な事実に実感し、万引きのない地域を作っていこうとする意欲や万引きに関する情報を収集しようとする態度を示していた。

一般成人の万引き対策を考えていくうえでは、地域社会の役割に目を向けることが必要であると考えられる。高木・辻・池田（2010）は、地域レベルで日頃から挨拶する知人の数が多い街区ほど住民間の協力行動が多く、結果的に犯罪件数が少なくなることを明らかにしている。また、一般成人の万引き被疑者では、高齢者の万引き被疑者と同じく独居の者の割合が高く、相談する他者をもっていない傾向があることが報告されており（大久保・堀江・松浦・松永・江村、印刷中）、背景要因として孤独感や寂しさがあるとされている。万引きの背景にある孤独感や寂しさを低減するうえでも地域の役割は重要となる。岡田・大久保・時岡・堀江・松下（2013）は、高齢者を対象とした万引き防止のための教育プログラムを開発している。この教育プログラムでは、高齢者の万引きの背景にあると考えられる孤独感や寂しさに焦点をあて、地域全体で万引きの防止を考えていくことを主旨としている。教育プログラムの構成は、中学生（岡田・大久保・時岡・七條他、2013）や保護者（岡田・時岡他、2013）を対象とする教育プログラムと同じく、クイズによる万引きに関する知識の獲得と、啓発動画にもとづく万引きの背景と対策に関するグループディスカッションである。教育プログラムの効果として、参加した高齢者は万引きに関する正しい知識を獲得し、万引きを地域の問題として考えていこうとする視点をもったことが示されている。

一般成人の万引き対策を考えるうえで考慮すべき点は、万引きに関する規範意識の高さである。万引き被疑者を対象に調査を行った大久保・堀江他（印刷中）は、万引きが悪いという規範意識は成人の万引き被疑者でも一般成人と同じぐらい高いことを報告している。そのため、万引きが悪いということを伝えるだけでは、万引き防止にとって有効な対策とはなり得ないと考えられる。むしろ、悪いことがわかっていてもやってしまう犯罪として万引きを捉え、その対策を考えていくことが必要である。

本論文では、地域で取り組む成人の万引き防止のための教育プログラムを作成した実践例を報告する。教育プログラムでは、万引きをする可能性があるものとして参加者を捉えるのではなく、むしろ万引きのない地域と一緒に作っていく担い手として参加者を捉える。教育プログラムの要素としては、①万引きに関する知識を獲得すること、②地域社会の一員として万引きの背景と対策を自ら考えること、という2つの要素を柱とする。これら2つのことを通して、万引きの現状を知り、自分たちの地域の問題として万引きを考える視点をもってもらいたいことをねらいとする。対象者としては、企業や商店に勤める一般の社会人と、社会人になる前の段階である大学生に教育プログラムを実施する。

## 2. 方法

### (1) 対象者

社会人については3か所で実施した。1か所目の参加者は、A市の商工会議所女性会に所属する一般女性18名であった。平均年齢は67.61歳（ $SD=10.36$ ）であり、年齢の範囲は54歳から87歳であった。2か所目の参加者は、B市にある一般企業の社員22名（男性18名、女性4名）であった。平均年齢は42.09歳（ $SD=11.75$ ）であり、年齢の範囲は23歳から61歳であった。3か所目の参加者は、B市内の商店街の店主等8名（男性4名、女性4名）であった。平均年齢は57.13歳（ $SD=6.72$ ）であり、年齢範囲は45歳から66歳であった。参加者の内訳をTable 1に示す。大学生については、C大学の2、3年生38名（男性4名、

Table 1 参加者（社会人）の内訳

|    | 会社員 | 自営業 | 公務員 | 主婦 | その他 | 合計 |
|----|-----|-----|-----|----|-----|----|
| 男性 | 18  | 3   | 0   | 0  | 1   | 22 |
| 女性 | 6   | 14  | 0   | 2  | 4   | 26 |
| 合計 | 24  | 17  | 0   | 2  | 5   | 48 |

女性34名)であった。平均年齢は20.18歳 ( $SD=1.07$ ) であった。

## (2) 実施時期

いずれも2012年11月に実施した。

## (3) 教育プログラムの流れ

教育プログラムはワークシートに基づいて行った。ワークシートの前半には香川県の万引きに関するクイズとその解説、後半には万引き防止の啓発動画をもとに万引きの背景や対策を考えて書き込む欄が含まれていた。プログラムの概略をTable 2に示す。実施の際には、対象者に合わせて細部を変更した。全体の所要時間は約60分間であった。

①万引きに関する知識の確認 香川県における万引きの実態について、先行研究（香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業，2011）での調査データをもとに作成した〇×クイズ（10問）に各自で解答してもらった。クイズの問題例は、「香川県は人口当たりの万引きの認知件数が全国でも少ない県である」「万引きが悪いということをわからずに万引きをしている人が多い」などである。

②万引きの現状の説明 参加者がクイズに解答した後、正解を確認し、解説を行った。その際、香川県は万引きが多い県であること、全件通報制が進んでいること、万引きの防止には周囲のかかわりが重要であることなどを確認した。なお、社会人の1か所目と大学生を対象とした実施の際は、クイズの解説はワークシートをもとに口頭のみで行ったが、社会人の2か所目と3か所目では、クイズの問題と解答、解説をプレゼンテーションファイルとして作成し、会場前部のスライドに投影した。

③万引き防止啓発動画の視聴 万引き防止のための啓発動画「万引きにレッドカード：社会で取り組む万引き防止」（大久保・時岡・有馬・松浦・高橋，2012；時岡・大久保・有馬，2012）から、主婦を主人公とする主婦編「ひとりぼっち」と男性サラリーマンを主人公とするサラリーマン編「その犯人の素顔」

Table 2 教育プログラムの大まかな流れ

| 項目                 | 内容   |
|--------------------|--|
| ①万引きに関する知識の確認（5分）  | 〇×クイズをもとに、万引きに関する自分の知識を確認する。参加者が各自でクイズに解答した。   |
| ②万引きの現状の説明（5分）     | 〇×クイズの解答と解説を提示することで、万引きに関する知識（香川県の万引きの現状、万引き犯の特徴など）を伝えた。                                     |
| ③万引き防止啓発動画の視聴（20分） | 万引きに関する啓発動画を2編視聴した。  |
| ④万引き対策について考える（10分） | ワークシートをもとに、動画の主人公が万引きに至った背景や心情を考えた。また、万引きを減らすために自分たちができることを考えた。最初に各自でワークシートに記入し、その後数名で話し合った。 |
| ⑤まとめ（5分）           | 万引き防止においては周囲のかかわりが重要であること、万引き対策は地域社会全体で考えていくことが必要であることを確認した。                                 |
| ⑥アンケート記入（5分）       | プログラムの効果としてアンケートに回答した。   |

を続けて視聴してもらった。

④万引き対策について考える 啓発動画の内容を踏まえて、自分たちの地域における万引き対策について考えてもらった。動画のストーリーとして、成人の万引きの背景には孤立している状態や周囲からの多重ストレスがあり、ふとした出来心で万引きに至ってしまう可能性があることを確認した。そのうえで、ワークシートをもとに、2人の主人公が万引きに至った背景と心情、どうすれば万引きをせずにすんだか、万引きを減らすために何ができるか、について考えてもらった。まず、個人でワークシートに記入してもらい、その後で近くに座っている参加者同士で5分ほど話し合ってもらった。

⑤まとめ 教育プログラムのまとめとして、万引きを防止するためには周囲のかかわりが重要であること、万引き対策は地域社会全体で考えていく必要があることを確認した。

⑥アンケートの記入 教育プログラムに対するアンケートを各自で記入してもらった。

#### (4) 万引き防止のための啓発動画のあらすじ

主婦編では、34歳の主婦である森本さゆみが、ふとしたことで万引きに至ってしまうストーリーが描かれている。森本さゆみは、夫の転勤に伴って1歳の子どもと一緒に引っ越してくる。馴染みのない土地であったため、友人や知人などの相談相手もおらず、毎日子育てだけをして暮らしている。夫は仕事が忙しく、休日にもかかわらずスーツを着て出勤していく。森本さゆみは、子どもを家においてドラッグストアに向かい、店内でカートに次々と商品を入れていく。ほぼ無意識的にそのままカートを押して店を出てしまったところを店員に止められ、その場でうずくまってしまう。警察署に連れて行かれ、万引きをした商品を確認しているところで、警察官は粉ミルクから子どもがいるのかと尋ねる。森本さゆみは家に子どもを置いてきたことに思い至る。警察官とともに急いで家に帰り、子どもの無事を確認して安堵する。その後、警察官は森本さゆみを子育て支援のNPOに連れて行き、悩んでいるのは1人ではないと諭す。帰宅した後、会社から帰ってきた夫はもっと子育てを手伝うと告げ、森本さゆみが涙を流したところで動画は終了する。全体の時間は約10分間である。

サラリーマン編では、32歳の男性サラリーマン川田武史が、多重ストレスによって万引きをしてしまうストーリーが描かれている。川田武史は、出勤直前に妻からゴミだしを頼まれる。しかし、ゴミ捨て場にゴミ袋を捨てた際に、近所の主婦たちから分別ができていないことを注意される。会社では、発注ミスをした部下を叱責するが、部下は軽い調子で反省している様子を見せない。むしろ、そのことで上司から川田武史が叱責されてしまう。その発注ミスの謝罪のために取引先に出向くが、取引先の社長に激高されてしまう。会社に帰って、別の仕事での部下の誤りを指摘するが、部下は聞く耳をもたず、それをみた上司から川田武史は嫌味を言われる。帰宅する途中で、川田武史は若者数名にからまれ、地面に押し倒されてしまう。その場を逃れた川田武史は、公園のブランコに座ってビールを飲みながら、一日にあった嫌な出来事を思い出す。何かに憑かれた様子で川田武史はコンビニに向い、発注ミスと関係のある商品を万引きする。2人の店員に見つかり、追いかけられたて捕まってしまうが、川田武史は店員を突き飛ばしたり、殴りつけたりして大けがを負わせてしまう。その後、警察署で取り調べを受けるが、殴りつけたコンビニ店員の1人が全治1ヶ月の重傷であることを知らされる。「もうおしまいだ」とつぶやく川田武史に対して、警察官は自分の人生から逃げられないと諭す。川田武史は裁判によって罪を裁かれることになるが、警察署を出たところで家族が待っており、妻から「この子たちのお父さんはあなたしかいない」と告げられ、罪を償う気もちをもったところで動画は終了する。全体の時間は約10分間である。

#### (5) 効果測定のためのアンケート

①プログラム全体の印象 プログラム全体の印象を尋ねるために、大久保・時岡他(2012)と同様に「よ

かった」「感動した」「勉強になった」「ひきこまれた」の4項目を用いた。プログラムの全体的な印象について、各項目に「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」の5件法での回答を求めた。

②万引きに関する実感 プログラムを通して万引きの特徴や実態について、どれぐらい実感が得られたかを調べるために、大久保・時岡他（2012）と同様の7項目を用いた（「万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した」「警察に通報することの重要性を実感した」など）。各項目に対して、「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」の5件法での回答を求めた。

③万引きに対する態度 プログラムを受けたことで、参加者が万引きに関する問題に対してどのように関わっていかようとしているかを調べるために、岡田・大久保・時岡・堀江他（2013）で用いた万引きに対する態度を尋ねる項目を用いた。これらの項目は、「地域づくりへの意欲」「万引きをした（しそうな）人へのかかわり」「万引きに関する情報探索」「万引きをしない効力感」の4下位尺度各3項目の計12項目からなる。各項目に対して、「1：全くあてはまらない」から「5：非常にあてはまる」の5件法での回答を求めた。

### 3. 結果

#### (1) プログラム全体の印象

プログラム全体の印象を尋ねる4項目について、社会人と大学生ごとに記述統計量を算出した（Table 3、Table 4）。社会人では、「よかった」「勉強になった」で平均値が4点を超え、「あてはまる」もしくは「非常にあてはまる」と肯定的な回答をした参加者の割合は85%以上であった。「感動した」「ひきこまれた」では平均値が3.62、3.79であり、肯定的な回答は5割から6割であった。大学生では、「よかった」「勉強になった」「ひきこまれた」で平均値が4点を超え、肯定的な回答をした参加者の割合はほぼ8割以上であった。「感動した」については、平均値が3.50であり、肯定的な回答をした参加者の割合は約5割で

Table 3 プログラム全体の印象の記述統計量（社会人）

|         | 全くあては<br>まらない | あてはま<br>らない | どちらとも<br>いえない | あてはまる      | 非常にあて<br>はまる | Mean | SD   |
|---------|---------------|-------------|---------------|------------|--------------|------|------|
| ①よかった   | 0 (0.00)      | 1 (2.08)    | 6 (12.5)      | 28 (58.33) | 13 (27.08)   | 4.10 | 0.69 |
| ②感動した   | 1 (2.13)      | 1 (2.13)    | 21 (44.68)    | 16 (34.04) | 8 (17.02)    | 3.62 | 0.87 |
| ③勉強になった | 0 (0.00)      | 1 (2.08)    | 3 (6.25)      | 31 (64.58) | 13 (27.08)   | 4.17 | 0.63 |
| ④ひきこまれた | 0 (0.00)      | 2 (4.26)    | 14 (29.79)    | 23 (48.94) | 8 (17.02)    | 3.79 | 0.78 |

注. 数値は各選択肢の人数を示す（括弧内はパーセンテージ）。

Table 4 プログラム全体の印象の記述統計量（大学生）

|         | 全くあては<br>まらない | あてはま<br>らない | どちらとも<br>いえない | あてはまる      | 非常にあて<br>はまる | Mean | SD   |
|---------|---------------|-------------|---------------|------------|--------------|------|------|
| ①よかった   | 0 (0.00)      | 0 (0.00)    | 0 (0.00)      | 15 (39.47) | 23 (60.53)   | 4.61 | 0.50 |
| ②感動した   | 1 (2.63)      | 2 (5.26)    | 16 (42.11)    | 15 (39.47) | 4 (10.53)    | 3.50 | 0.86 |
| ③勉強になった | 0 (0.00)      | 0 (0.00)    | 0 (0.00)      | 12 (31.58) | 26 (68.42)   | 4.68 | 0.47 |
| ④ひきこまれた | 0 (0.00)      | 2 (5.26)    | 6 (15.79)     | 14 (36.84) | 16 (42.11)   | 4.16 | 0.89 |

注. 数値は各選択肢の人数を示す（括弧内はパーセンテージ）。

あった。平均値について社会人と大学生を比較したところ、「よかった」( $t(84) = 3.77, p < .001$ )、「勉強になった」( $t(84) = 4.21, p < .001$ )、「ひきこまれた」( $t(83) = 2.05, p < .05$ )については、社会人よりも大学生の方が高かった。

### (2) 万引きに関する実感

万引きに関する実感を尋ねる7項目について、社会人と大学生ごとに記述統計量を算出した(Table 5、Table 6)。その結果、社会人、大学生ともにすべての項目で平均値が4点を超えていた。社会人の「警察に通報することの重要性を実感した」以外は、肯定的な回答をした参加者の割合が8割以上であった。特に、「万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した」「万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した」の得点が高く、社会人の1名を除いて、すべての参加者が肯定的な回答をしていた。平均値について社会人と大学生を比較したところ、「警察に通報することの重要性を実感した」( $t(84) = 2.84, p < .01$ )、「万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した」( $t(84) = 3.02, p < .01$ )については、社会人よりも大学生の方が高かった。

### (3) 万引きに対する態度

万引きに対する態度を尋ねる12項目について、項目ごとの平均値とSDをTable 7に示す。いずれの項目についても、社会人と大学生で有意な差はみられなかった。下位尺度ごとの $\alpha$ 係数を算出したところ、「地域づくりへの意欲」が.66、「万引きをした(しそうな)人へのかかわり」が.81、「万引きに関する情報探索」が.71、「万引きをしない効力感」が.84であり、一定の信頼性を有することが示されたため、それぞれ

Table 5 万引きに関する実感の記述統計量(社会人)

|                                 | 全くあてはまらない | あてはまらない  | どちらともいえない  | あてはまる      | 非常にあてはまる   | Mean | SD   |
|---------------------------------|-----------|----------|------------|------------|------------|------|------|
| ①万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した     | 0 (0.00)  | 0 (0.00) | 6 (12.77)  | 29 (61.70) | 12 (25.53) | 4.13 | 0.61 |
| ②警察に通報することの重要性を実感した             | 0 (0.00)  | 1 (2.08) | 12 (25.00) | 21 (43.75) | 14 (29.17) | 4.00 | 0.80 |
| ③万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した       | 0 (0.00)  | 0 (0.00) | 1 (2.08)   | 25 (52.08) | 22 (45.83) | 4.44 | 0.54 |
| ④万引きする側にも背景があることを実感した           | 0 (0.00)  | 0 (0.00) | 4 (8.33)   | 30 (62.50) | 14 (29.17) | 4.21 | 0.58 |
| ⑤悪いということを知っていても万引きをしてしまうことを実感した | 0 (0.00)  | 0 (0.00) | 6 (12.50)  | 27 (56.25) | 15 (31.25) | 4.19 | 0.64 |
| ⑥万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した  | 0 (0.00)  | 0 (0.00) | 1 (2.08)   | 20 (41.67) | 27 (56.25) | 4.54 | 0.54 |
| ⑦万引きをするとどういふ措置が取られるのかを実感した      | 0 (0.00)  | 0 (0.00) | 4 (8.33)   | 31 (64.58) | 13 (27.08) | 4.19 | 0.57 |

注. 数値は各選択肢の人数を示す(括弧内はパーセンテージ)。

Table 6 万引きに関する実感の記述統計量 (大学生)

|                                 | 全くあてはまらない | あてはまらない  | どちらともいえない | あてはまる      | 非常にあてはまる   | Mean | SD   |
|---------------------------------|-----------|----------|-----------|------------|------------|------|------|
| ①万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した     | 0 (0.00)  | 0 (0.00) | 2 (5.26)  | 25 (65.79) | 11 (28.95) | 4.24 | 0.54 |
| ②警察に通報することの重要性を実感した             | 0 (0.00)  | 0 (0.00) | 0 (0)     | 22 (57.89) | 16 (42.11) | 4.42 | 0.50 |
| ③万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した       | 0 (0.00)  | 0 (0.00) | 0 (0)     | 9 (23.68)  | 29 (76.32) | 4.76 | 0.43 |
| ④万引きする側にも背景があることを実感した           | 0 (0.00)  | 0 (0.00) | 2 (5.26)  | 20 (52.63) | 16 (42.11) | 4.37 | 0.59 |
| ⑤悪いということを知っていても万引きをしてしまうことを実感した | 0 (0.00)  | 0 (0.00) | 4 (10.81) | 26 (70.27) | 7 (18.92)  | 4.08 | 0.55 |
| ⑥万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した  | 0 (0.00)  | 0 (0.00) | 0 (0.00)  | 15 (39.47) | 23 (60.53) | 4.61 | 0.50 |
| ⑦万引きをすることでどういふ措置が取られるのかを実感した    | 0 (0.00)  | 0 (0.00) | 1 (2.63)  | 21 (55.26) | 16 (42.11) | 4.39 | 0.55 |

注. 数値は各選択肢の人数を示す (括弧内はパーセンテージ)。

Table 7 万引きに対する態度の記述統計量

|   | Mean | SD   |
|---|------|------|
| 地域づくりへの意欲                                   |      |      |
| ①万引きが起りにくい社会や地域を作っていきたいと思う                  | 4.45 | 0.61 |
| ②まわりの人が万引きをしなくてもいいような社会になればよいと思う            | 4.49 | 0.63 |
| ③万引きをしても立ち直ることができる社会や地域であってほしいと思う           | 4.40 | 0.56 |
| 万引きをした (しそうな) 人へのかかわり                       |      |      |
| ④万引きをしてしまいそうな人がいたら、その人の気持ちや背景をわかってあげたいと思う   | 4.10 | 0.78 |
| ⑤万引きをしてしまいそうな人がいたら、そうしなくてもいいようにかかわってあげたいと思う | 4.00 | 0.80 |
| ⑥万引きをしてしまった人がいたら、できる限りその人のことを理解してあげたいと思う    | 3.94 | 0.76 |
| 万引きに関する情報探索                                 |      |      |
| ⑦万引きに関するニュースや話題に目を向けていきたいと思う                | 4.08 | 0.69 |
| ⑧万引きの背景や現状のことを常に知っておきたいと思う                  | 3.99 | 0.65 |
| ⑨機会があれば、万引きのことを他の人と話し合ってみてみたいと思う            | 3.68 | 0.74 |
| 万引きをしない効力感                                  |      |      |
| ⑩これから先、自分は万引きをしないと思う                        | 4.64 | 0.57 |
| ⑪万引きをしそうになっても、その気持ちを抑えることができると思う            | 4.64 | 0.57 |
| ⑫人から万引きに誘われても、きちんと断ることができると思う               | 4.82 | 0.38 |

Table 8 万引きに対する態度の記述統計量

|                     | Mean  | SD   |
|---------------------|-------|------|
| 地域づくりへの意欲           | 13.34 | 1.39 |
| 万引きをした（しそうな）人へのかかわり | 12.05 | 1.99 |
| 万引きに関する情報探索         | 11.75 | 1.66 |
| 万引きをしない効力感          | 14.09 | 1.35 |

Table 9 万引きに対する態度とプログラム全体の印象、万引きに関する実感との相関係数

|  | 地域づくりへの意欲 | 万引きをした（しそうな）人へのかかわり | 万引きに関する情報探索 | 万引きをしない効力感 |
|--|-----------|---------------------|-------------|------------|
| ①よかった                                  | .38***    | .21*                | .38***      | .10        |
| ②感動した                                  | .26*      | .23*                | .23*        | .06        |
| ③勉強になった                                | .38***    | .26*                | .39***      | .25*       |
| ④ひきこまれた                                | .22*      | .13                 | .29**       | .04        |
| ①万引きには世代ごとに特徴的な背景があることを実感した            | .00       | -.04                | .18         | .01        |
| ②警察に通報することの重要性を実感した                    | .33**     | .08                 | .43***      | .22*       |
| ③万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した              | .35***    | .24*                | .41***      | .33**      |
| ④万引きする側にも背景があることを実感した                  | .14       | .17                 | .09         | .04        |
| ⑤悪いということをわかっているにもかかわらず万引きをしてしまうことを実感した | .03       | .05                 | .08         | .01        |
| ⑥万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した         | .38***    | .20                 | .37***      | .14        |
| ⑦万引きをするとどういった措置が取られるのかを実感した            | .21       | .12                 | .35***      | .24        |

\* $p < .05$ 、\*\* $p < .01$ 、\*\*\* $p < .001$

れ3項目の合計得点を算出した（Table 8）。

各下位尺度の理論的な中央値は9点である（各項目に「3：どちらともいえない」と回答した場合）。この9点と4下位尺度の平均得点との差を*t*検定によって調べたところ、すべての下位尺度で有意な差がみられた（ $t = 14.17 \sim 34.77$ ,  $p < .001$ ）。

#### （4）万引きに対する態度とプログラム全体の印象、万引きに関する実感との関連

万引きに対する態度の4下位尺度とプログラム全体の印象との相関係数を算出した（Table 9）。地域づくりへの意欲と万引きに関する情報探索は、印象の4項目すべての有意な正の相関を示した。万引きをした（しそうな）人へのかかわりは、「ひきこまれた」を除く3項目と有意な正の相関を示した。万引きをしない効力感は「勉強になった」と有意な正の相関を示した。

万引きに対する態度の4下位尺度と万引きに関する実感との相関係数を算出した（Table 9）。地域づくりへの意欲と万引きに関する情報探索は、「警察に通報することの重要性を実感した」「万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した」「万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感した」



と有意な正の相関を示した。万引きに関する情報探索は、「万引きをするとどういふ措置が取られるのかを実感した」とも有意な正の相関を示した。万引きをした（しそうな）人へのかかわりは、「万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した」と有意な正の相関を示した。万引きをしない効力感は、「警察に通報することの重要性を実感した」「万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した」と有意な正の相関を示した。

#### (5) プログラム中の参加者の様子

いずれの実施場所においても、参加者はプログラムの内容に対して概ね高い関心をもって参加していた。クイズに関して、香川県での人口当たりの万引き認知件数の多さに対しては、多くの参加者が驚いている様子がみられた。アンケートの自由記述欄に、「クイズ方式の講義説明がよかった」という感想がみられ、クイズ形式で問題意識を喚起したことが効果的であったものと思われる。また、啓発動画に対しては集中して視聴している様子がみられ、その後の話し合いにおいても特別に実施者が促すことなく、多くの参加者が自発的に意見を交換していた。アンケートの自由記述で、「日頃万引きについて考えもしなかったが、部下等の心情についても注意していこうと思う」や「主婦編の場合、引越した時点で市の方からの情報を先に伝えてあげてほしい」などの意見があり、教育プログラムに参加したことによって、これまで注目していなかった万引きの問題に目を向けたり、地域や周囲の他者の役割について思い至った参加者も少なくないことが窺われる。

## 4. 考察

本論文では、社会人と大学生を対象とする一般成人の万引き防止のための教育プログラムを作成し、実践した事例を報告した。教育プログラムの構成については、①万引きに関する知識を獲得すること、②地域社会の一員として万引きの背景と対策を自ら考えること、の2つを大きな柱として設定した。以下に、参加者に対するアンケートの回答をもとに教育プログラムの効果を検討していく。

プログラム全体の印象について、社会人と大学生のいずれの参加者からも概ね肯定的な評価が得られた。「よかった」「勉強になった」については、肯定的な回答をした参加者の割合が85%以上であり、社会人の参加者にとっても大学生の参加者にとっても、プログラムが肯定的で学習効果のあるものとして経験されたと考えられる。「勉強になった」については、○×クイズの形式で万引きの知識を伝えたために、肯定的な評価が得られたものと思われる。自ら万引きの実態や特徴について考えた後に正解を提示することで、参加者は意外性を感じる場面もあれば、自分の認識の正しさを確認した場面もあったはずである。これらの経験によって「勉強になった」という感想をもったのであろう。一方で、「感動した」については、社会人でも大学生でもやや肯定的な回答の割合は少なめであった。教育プログラムで視聴した啓発動画は、安易な解決を示すものではなく、課題を残して終了するものであった。特に、サラリーマン編では、出来心からの万引きが強盗に至ってしまい、主人公は起訴から裁判というプロセスに向かう途中でストーリーが終了する。必ずしも簡潔なエンディングではなく、課題を残したままに終了する動画を用いたために、「感動した」という感想にはつながりにくかったものと考えられる。ただし、「ひきこまれた」について、社会人でも大学生でも65%以上が肯定的な回答をしており、啓発動画を用いたプログラム自体は、参加者の関心をひくものになっていたと思われる。

万引きに関する実感については、社会人と大学生のいずれにおいても全般的に肯定的な回答が得られた。ほぼすべての項目で肯定的な回答をした参加者の割合が8割を超えていた。特に、「万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した」「万引きをした際にまわりの人の対応が重要であることを実感し

た」に対して肯定的な評価が得られ、万引きを地域社会の問題として考えることが必要であるとする今回の教育プログラムの意図が明確に伝わったものと考えられる。また、今回用いた啓発動画ではいずれも他者とのかかわり方が万引きに至る背景として描かれている。この点が明確に伝わったために、まわりの人の対応の重要性を認識したのであろう。

万引きに対する態度として、地域づくりへの意欲、万引きをした（しそうな）人へのかかわり、万引きに関する情報探索、万引きをしない効力感という4つの側面での効果を想定した。4側面とも平均得点は高く、肯定的な回答が得られたが、特に万引きをしない効力感と地域づくりへの意欲の得点が高くなっていった。万引きをしない効力感については、啓発動画を通して万引きの背景にある要因を具体的に知ることができたため、対処の仕方をイメージすることができ、効力感を高くもったものと考えられる。地域づくりへの意欲については、「万引き対策は地域社会全体で取り組むことを実感した」の平均得点が高かったことと一貫する結果である。今回の参加者は、万引き対策における地域の重要性を感じ、自分も地域づくりの面から万引き対策にかかわろうという意欲を高めたものと考えられる。一方で、万引きに関する情報探索の得点はやや低めであったため、プログラムに参加した後にはいかにして万引きへの関心を持続させるかが今後の課題である。万引きに関する情報探索は、プログラムに対する印象および万引きに関する実感と正の関連を示す部分が多かった。そのため、参加者がよりプログラムの内容を肯定的に受け止め、多くの知識が得られたと感じられるように実施の仕方を工夫することが必要である。また、期間を空けて複数回にわたるプログラムを実施することも有効かもしれない。

今回の教育プログラムでは、万引きの現状を知り、自分たちの地域の問題として考える視点をもってもらうことを主要なねらいとしていた。社会人においても、大学生においても、プログラムが勉強になったという印象をもち、万引きに関する様々な事実に強く実感していたことから、香川県における万引きの現状について一定の知識をもったものと考えられる。また、自分が今後万引きをしないという効力感をもち、地域全体で万引き対策を考えることの必要性を認識していた。企業や商店に勤める一般の社会人は、地域づくりの担い手として重要な人的資源であり、彼らに地域社会の視点で万引き対策を考えてもらうことは大きな効果を生むと期待できる。また、社会人になる前の大学生においても、万引きの現状を知り、地域社会の役割という視点をもつことは重要である。これらのことから、今回の教育プログラムは一般成人の万引きの問題に対する対策として有効なものとなり得るだろう。今後は、様々な対象者に教育プログラムを実施していくことが課題となる。企業における社内研修や商工会議所での集まり、生涯学習の一環としてなど、一般成人に対してプログラムを実施し得る場としては様々なものが考えられる。こういった場が適切かつ効果的であるかを考えて、教育プログラムを普及させていくことが今後の課題である。

## 引用文献

香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業（2011）. 万引き防止対策に関する調査報告書 香川大学・香川県警察警察庁（2012）. 平成24年上半期の犯罪情勢

Krasnovsky, T., & Lane, R. C. (1998). Shoplifting: A review of the literature. *Aggression and Violent Behavior*, 3, 219-235.

岡田 涼・大久保智生・時岡晴美・堀江良英・松下昌明（2013）. 高齢者を対象とした万引き防止のための教育プログラムの開発と実践 香川大学生涯学習教育研究センター研究報告, 18, 1-10.

岡田 涼・大久保智生・時岡晴美・七條正典・松浦隆夫・大前和弘・三好一生（2013）. 中学生を対象とした万引き防止のための教育プログラムの開発と実践 香川大学教育実践総合研究, 26

岡田 涼・時岡晴美・大久保智生・七條正典・松浦隆夫（2013）. 保護者を対象とした青少年の万引き防止のための教育プログラム

の開発と実践 香川大学教育実践総合研究, 26

大久保智生 (2012). 青少年の万引きに対する規範意識：香川県子ども安全・安心万引き防止事業の取り組みから 青少年問題, 646, 44-47.

大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀 (印刷中). 万引きに関する心理的要因の検討：万引き被疑者を対象とした意識調査から 科学警察研究所報告, 62

大久保智生・時岡晴美・有馬道久・松浦隆夫・高橋 護 (2012). 万引き防止啓発の動画制作プロジェクトへの参画による青少年の意識変化について (その2) —動画の視聴者の評価と参画した大学生の中学生の意識調査から— 香川大学教育実践総合研究, 25, 57-68.

高木大資・辻 竜平・池田謙一 (2010). 地域コミュニティによる犯罪抑制：地域内の社会関係資本および協力行動に焦点を当てて 社会心理学研究, 26, 36-45.

時岡晴美・大久保智生・有馬道久 (2012). 万引き防止啓発の動画制作プロジェクトへの参画による青少年の意識変化について (その1) —青少年編「万引きはゲームじゃない」のDVD制作による啓発効果を中心に— 香川大学教育実践総合研究, 24, 153-160.